

福祉系 対人援助職養成の 現場から^⑭

西川 友理

お勉強って大変！

ここ半年ほどの間、私は、ある資格試験の勉強を頑張っており、先日、気合入れて受験してきました。

その結果…不合格でした。

どれだけ、どれだけ悔しかったか！あんなに、勉強したのに…！

そのかわり、

「ああ、こういうことかあ…仕事しながら勉強して、不合格で悔しいって、こういうことかあ…」と、身にしみて解りました。

社会人の社会福祉士国家試験受験生に対し、

「お仕事しながらの受験勉強は大変ですね。」

と、言っていたのですが、実際仕事をしな

がらの受験勉強を体験したことがなかった私です。

今回の受験勉強と不合格を踏まえて、

「お仕事しながらの受験勉強って、ほんつとに、大変ですよね！」

と、今までとは違う感慨をもって口にするようになりました。

次回は絶対に合格したい。その思いから、自らの受験勉強を振り返り、さらに仕事でしょっちゅう目にする社会福祉士国家試験受験生の皆さんが、どんな風に受験勉強をしているのかを参考にしてみることにしました。

様々な勉強スタイルと

共通点

社会福祉士国家試験は19科目の5択問題150問から成ります。その合格率は、例年大体26%~28%程度。昨年は18.8%とえらく難しかったのですが、いずれにせよ4人~5人に1人しか合格しないテストです。受験勉強はかなり大変なものになります。

少なくとも過去問題を何年分か解く。大体3年分を3回やるとか、いや5回やらないと合格しない、とか、4年分を3回やるのがベスト、などと、指導者によって諸説ありますが、要は何年か分を繰り返しやって、出題の形式に慣れることが大事、と言われています。

また、基礎から勉強しようと19科目分の教科書を全て読むのは大変です。最近各社が受験者向けの参考書を発売しているので、それらを活用します。今や「大事なところをこの一冊に…」 「一問一答形式で…」 「間違いさがし形式で…」 「絵や図でビジュアルを重視した解説を…」 等々、工夫を凝らした参考書が発売されています。自分にあった参考書を探し出し、熟読します。

それでもわからないところや覚えられない所は、ノートにまとめたり、単語帳を作ります。まとめたものの紙の分厚さが増えていくさまを見ると、なんとなく「やってるやん、私！」という気分にもなります。

…だいたいこのあたりまでは皆さん共通して実践していっちゃいます。

勉強をする時、参考書をじっくり読んだり、ノートにまとめるなどして知識を得、「暗記」することは受験勉強の基本です。これは、勉強時間を捻出し、一人でコツコツと頑張れる事です。

難関を突破し合格された皆さんは、これに加えて、各々のご事情に合わせた勉強ス

タイルを作り上げていたようでした。

子どもが小さいから毎日21時には一緒に寝てしまう、という受験生は、

「朝の4時に起きて、子どもが起きてくるまで、毎日勉強していました。」

とのこと。同じく小さい子どもがいるママさん同士で受験勉強のサークルを作り、早朝4時に当番制で一問一答の問題と解説のメールを配信し、目覚まし代わりにしていたとのこと。

「出題をする、という責任があるから、いい意味で緊張感がありました。」

とのこと。

ある大学では、受験生の学生達が、模擬問題を自分達で作って、出題しあうサークルをつくっていました。

「五択問題を一問作るだけでも大変です！解説もしっかり出来なあかんし…。」

「古いデータで作問しちゃってたり、正誤判定が出来ない問題文になったりすること、あるでしょ？」

「あるある！問題を間違えて作ってしまっていないか、確認作業の方に時間がかかります。たくさん資料を読むから、結構勉強になります。」

と言って、週に一回、お互いに「勝負じゃ！」と言いながら出題しあっていました。

記憶力に自信がなくなってきたというミドルエイジのサラリーマン。奥様に定期的に介護保険や医療保険の説明をしている、とのこと。

「といっても、全部暗記してたわけじゃなくて、資料の類を見せながらですけどね…『みさんの番組みたい！わかりやすいわー、あなたすごーい！』って言われて、調子に乗りました、えへへ。」

「なるほど、ごちそうさまです(笑)」

「参考書やら市役所のパンフレットやら参照して説明してたら、いつのまにか全体的に理解出来ていきましたわ！」

…あ、そうか、と気付きました。しっかりと受験勉強をしていらっしゃる方々のうち、ある一定の方々は単に知識を溜め込むと言う「暗記」だけではなく、「解説」という形でアウトプットをしているのです。ママさんや大学生のサークルは、出題する問題を考えその解説を考えるということで、サラリーマンの方は、奥様に教えるという事で、アウトプットなさっています。

そういえば以前、学生各々にキーワードを担当してもらい、「翌週には、皆に自分の担当キーワードについて解説すること」という内容の授業を半年実施したことがあります。授業終了後、受講していた学生からは、「とても大変だったけど、自分が担当したキーワードは、ものすごく理解できたし、後々まで結構覚えている」と言っていました。

だれかに対し「解説する」というプロセスを踏むと、理解力が格段に上がるようなのです。…なるほど、確かに私は地道にノートに書き写したり、単語帳を作ったりと、1人で黙々と知識を溜め込む「暗記」型の勉強のみで、アウトプット型の勉強は何もしていませんでした。もしかしたら、これが今回の不合格の原因の1つかもかもしれません。

理解が出来ると

解説も出来る

また、今回私が受けた資格試験の中で、全体像を把握していれば、単純に判断できるところを、細かいうる覚えの知識に引きずられ間違えてしまった問題がいくつかありました。全体像を把握していない状況では、おぼろげに覚えている細かい知識の一つ一つが、かえって判断を鈍らせる原因となり、その都度つまづく小石のようになってしまっていたのです。

小中学校でやった漢字や英単語の小テストのように、覚える範囲が一定程度決まっているものなら、何よりも細かい知識を暗記する作業が優先されます。しかし、総合的な知識や深い理解を必要とする試験については、細かい暗記物は後回しにして、まずは全体を大づかみで理解することを優先させると、自然と細かい知識も覚えやすくなるのかもしれませんが。細かい知識が有機的な連携を持って存在しているということがわかり、芋づる式に覚えられるようになるためです。

ところで、この大づかみな理解の仕方というのは、人に解説をする時に必要なプロセスなのです。逆に言えば、細かい知識をいくら沢山覚えていたとしても、全体を把握していなければ他者に解説が出来ないように思います。

「伝える」と

「解説する」の違い

単に知っている事象を誰かに「伝える」というのは、情報を右から左へ流すという作業に過ぎません。写真を見せたり、辞書のある部分を見せるといった行動と同じで

す。「暗記」したものを口に出す、紙に書くといったこともこれにあてはまります。

しかし、人に「解説する」ためには、まず解説したい事象そのものの来し方、行く末、背景、他への影響など全体像を把握しなければなりません。そうすることで、その事象の重要な意味を持つ部分、たいして重要ではない部分、他の事象とのつながりといった、情報の濃淡が見えてきます。頭の中で整理が出来るのです。

それから、解説をする目的にあわせて、その事象のどこに焦点を合わせるのかを考えます。時には全体像を把握した際に、たいして重要ではないと感じていた部分に、焦点を合わせる必要が出てくることもあるのです。

それらを踏まえた上で、解説をする相手をシュミレーションし、その事象をどう話せば伝わるのか、本来の意味や構造を損なわないように気をつけながら、相手が解るように話を加工しなければなりません。

そういった準備を経て、実際に解説をします。解説中にも相手の反応を見つつ、表現を工夫します。

これが解説の一連の手順になると思います。

いざ実際に解説をしてみると、自分はどこが解っていないのかがどんどん判明する、といった事もあります。そうなればまた調べ直しをすることで、その事象に対する全体の理解が深まっていきます。

「伝える」を

「解説する」に戻す作業

そういえば、授業をしていると、時々こんなことがあります。

ある事象について解説をします。同じ事象について3回、4回と授業を繰り返すと、ある程度、話の道筋が出来ていきます。上手く言えませんが、「説明が完成されていく感じ」がします。すると突然、今まで全く気にならなかった所、きちんと説明出来ていると思っていた所に、違和感を持つようになるのです。

「あれ、これほんとにこの解説でいいの？…なんで前回まで気付かんかったんやろ？」

このような違和感を持ったときには、その事項について資料を見る、精通している人に話を聞く等、もう一度調べ直します。そしてそれまで知っていた内容よりも、より深く、事情や実態を知ること

「あー、そういうことか！」
と納得出来ると、やっと違和感なく「解説」が出来るようになります。

特に私は社会福祉に関する事項を教えているので、社会が変化するにつれ、それまで行っていた解説とその時々社会情勢にギャップが生じやすいのかもしれませんが、そのギャップを持ったまま、解説するのは、自分の中でも無理があるのです。

しかし、私が感じる違和感は、社会情勢とのズレ、といった要因だけではないように思います。おそらく、授業は単に情報を伝えるものではなく、理解してもらうためのものだと思っているから、自分の説明がマニュアル化し、単なる情報を伝える作業になりつつあるという時に、心のどこかから「こんなの授業じゃないよ！」という違和感が生じてくるのではないかと感じてい

ます。そうすると、それまでの理解をさらに深める必要が生じるのです。

理解の深度と伝わる深度

個人的な感覚ですが、解説する側の理解の深度が、そのまま聞いている相手に伝わる限度であるように感じます。もちろん聞き手の中には一を聞いて十を知る人もいますし、それ以前からの経験や身につけた知識と統合し、何かしらの気づきに繋がる人もいます。ただ、解説する側がよくわかっていない話は、多くの場合、聞いている相手にもあまり理解してもらえないようです。極端に言えば、教科書のある部分を読むなど、全く同じ文章を発している場合であっても、その差は生じます。声の抑揚の付け方や言葉を切るタイミングといった非言語的な表現が大きく影響しているのではないかと思います。

これを逆に解釈すれば、相手が「なるほどねー！」と感心してくれるほどに伝わった事項については、自分は結構理解していると判断できるかと思います。もちろん誤解していることを自信満々に伝えている可能性があることを疑ってかかる必要はありますが、いずれにせよ、単に知識を頭に入れるという事は理解するという事ではなく、理解するという事と理解を深めるという事もまた、違うようなのです。

勉強するという事

このように考えると、単純に物事を暗記

するという事は、勉強というよりも、作業に近いのかなと思います。勉強の手法の1つに「暗記」はあるけれど、単に暗記しただけの知識は、使わないとすぐに忘れてしまうことから、暗記＝本来の勉強ではない、ということが解ります。

「ある分野を勉強するという事は、その分野を知る、覚える、というだけじゃなくて、理解する、さらには理解を深めるっていう事なんだなあ…。」

気が付けば、とても基本的な所に戻ってきっていたのでした。

…さあ、もう一度チャレンジするとしましょうか！

.....

※今回書いた内容に関連して、面白い情報を得たのでご紹介します。

慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスで開発された「学習パターン」というものです。ホームページには、「自律的で創造的な学び方のコツをパターン・ランゲージという形式でまとめたもの」と説明されており、39のパターンがまとめられています。この中に、「アウトプットから始まる学び」「はなすことでわかる」「教えることによる学び」といったものが見受けられます。その他、勉強や研究活動に使えるパターンが提示されています。

「学習パターン (Learning Patterns)」
慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス 学習パターンプロジェクト

<http://learningpatterns.sfc.keio.ac.jp/index.html>